

〇〇〇立〇〇〇〇高等学校 〇〇 〇〇〔農業〕

1 はじめに

千葉県教育長期ビジョン「千葉の教育”夢・未来2025”」では、「人々のふれ合いと社会参加による活力ある地域コミュニティを実現させることが教育活性化の鍵である」としている。また、「学校、家庭、地域社会がそれぞれの役割を果たしながら、一体となって教育力を高める」とし、各教育機関が地域社会との連携をより一層深めていくという学校教育の一つの方向性を打ち出している。そして、その方針を受け、県内各高等学校は「開かれた学校」そして「魅力ある学校づくり」を目指し、学校、家庭および地域社会と連携しながら未来を担う子ども達の可能性を引き出すさまざまな事業を実施している。

本校も平成16年度より近隣の教育機関との連携事業を開始した。その中心は市立中央小学校との「作物の栽培」とおした交流である。

本校は従来の学習形態に加え、より農業高校の可能性を広げるため、前記のとおり学習の場を地域に広げた。これは、従来の学習活動で学ぶ内容に加え、地域の教育力を活用し今まで以上の学習成果を期待するものである。

平成16年度より始まった連携事業は少しずつ拡大し、その実施方法も毎年改善し、より充実する方向へ進み、現在に至っている。この活動をとおして生徒達は、学び取った日々の学習成果を発揮する機会を得て、戸惑いながらもいきいきと自信を持って小学生と接していく。学習成果の還元と同時に、生徒の学習意欲をかき立たせることができる。何事にも代え難い有意義な時間となることは必然であろう。

本研究では、科目「総合実習」の目標の一つでもある、企画力やコミュニケーション能力など実践的な能力と態度を育成する手段として、今後も地域連携事業による効果的学習を模索していきたい。

2 科目「総合実習」について

(1) 科目「総合実習」2学年全科での実施について

本校には畜産科、生産技術科、食品流通科、生活科学科の4学科があり、1学年各科1クラスずつ計4クラス編成となっている。

本校の科目「総合実習」は、平成17年度以前の2単位科目から平成18年度より各科とも3単位科目で設定され実施している。特徴的なのは2単位が時間割内に、残る1単位が時間割外に設定されていることだ。この1単位は、いわゆる「農場当番」などの実習による履修となっている。この実施にあたっては、各科とも専門選択との連動を基本とし、その部門内による実習が中心となる。しかし、時間割外の1単位修得の条件としてすべてを当番による実施に限定はしていない。次項(表1)の内容による学習活動であれば、時間割外1単位の授業参加と認めている。

また、実施時期は各専門選択の部門による事情を考慮し、長期休業中の実施が中心でも日常の放課後を使った当番実習が中心であろうとも実施時間は同じように扱うこととしている。

表1 「総合実習」時間割外対象事例

各科専門選択部門による当番実習 農業クラブ活動への参加 <ul style="list-style-type: none"> ・ 農業クラブ研究発表大会への参加（運営，見学） ・ プロジェクト活動への参加 インターンシップへの参加 地域連携事業への参加 福祉施設へのボランティア 救急法講習 安全な実験・実習を実施するため必要な講習として認定。

表2 実験・実習を伴う科目一覧

学 科	教 科	1 年 生	2 年 生	3 年 生	合 計
畜 産 科	総合実習	2	3		5
生産技術科	総合実習	2	3		5
食品流通科	総合実習	2	3		5
生活科学科	総合実習	2	3		5

(2) 平成18・19年度各科の科目「総合実習」時間割外1単位の実施状況

畜産科

酪農部門 平常時・長期休業中の家畜飼養管理。

養豚部門 平成18年度農業クラブ研究発表大会へのプロジェクト発表参加。

平常時・長期休業中の家畜飼養管理。

養鶏部門 平常時・長期休業中の家畜飼養管理。

生産技術科

野菜部門 平常時・長期休業中の作物栽培管理。

近隣保育園・小学校との連携事業への参加。

地域行事（「いきいき・産業まつり」など）への参加。

草花部門 平常時・長期休業中の作物栽培管理。

果樹部門 平常時・長期休業中の作物栽培管理。

造園部門 平常時・長期休業中の庭園管理。

食品流通科

食品流通科全員参加によるインターンシップ（現場実習）5日間実施を総合実習時間割外1単位分として認定。

生活科学科

平常時・長期休業中の野菜，草花，各部門での栽培管理。

近隣保育園での職業体験。

19年度 近隣保育園・幼稚園との連携事業（プロジェクト活動）。

近隣福祉施設へのボランティア。

平成18年度の特徴として，本校が農業クラブ事務局として県大会・関東大会の運営等に携わり，その活動も「総合実習」内の活動として指導。

3 生産技術科での科目「総合実習」の効果的指導法の実践

(1) 生産技術科「野菜」専門選択について

本校生産技術科は2年次より「野菜」「草花」「果樹」「造園」の4つの専門選択に分かれ、科目「野菜」3単位、「総合実習」3単位を専門選択ごとに履修することになる。

本教科研究で取り組む科目「総合実習」の研究の中心となるのは、私が所属する生産技術科2学年専門選択「野菜」の専攻生徒である。平成18年度生産技術科2学年専門選択「野菜」専攻生徒は10名おり、その中で9名が農業後継者である。また、平成19年度生産技術科2学年専門選択「野菜」専攻生徒は9名で、そのうち農業後継者は7名である。

以上のように「野菜」専攻生徒は、農業後継者の割合が比較的高く、農業を学ぶという明確な目的を持った生徒が学んでいるといえる。

(2) 目標

本研究では、高等学校指導要領に記されているとおり「農業の各分野に関する体験的な学習を通して、総合的な技術を習得させ、経営と管理についての理解を深めさせるとともに、管理能力や企画力など農業の各分野の改善を図る実践的な能力と態度を育てる」ことを主眼に活動を進めていく。専門選択科目「野菜」との関連を意識し、知識の習得、そして農場実習による栽培技術の習得を図る。

本研究の主題である科目「総合実習」において、習得した農業に関する知識、栽培技術を実践する場を設定し、企画力やコミュニケーション能力など実践的な能力と態度を効果的に指導することを目標とする。

本校生徒の社会性の育成

- ・共通の体験的学習を通して、コミュニケーション能力を育成する。
- ・自身に対する客観的視野を育成する。
- ・地域の中の個人、そして所属意識の育成を図る。

本校生徒の自主性の育成

- ・対小学生に技術・知識を伝える事の責任感を持たせ、積極的な姿勢や自ら学び行動することのできる姿勢を育成する。

地域連携事業の地域貢献について

- ・小学生にアンケートを実施

事業の内容について、本校生徒に対する意識について 等

(3) 研究内容

ア 実施方法および場所

小学校や近隣教育機関との地域連携事業から、通常の学習環境から得ることのできない体験を通して生徒の社会性・自主性を育成する。また、意識調査（アンケート）等を活用し、状況を確認しながらさらなる指導法を探る。

実際の活動として、日本の基幹作物「イネ」や「サツマイモ」等の栽培学習の継続的支援をする。

近隣教育機関（小学校など）との連携事業を実施（稲作，サツマイモ作りなど）

稲作 本校隣接水田 20アール
サツマイモ作り 市立中央小学校サツマイモ圃場 2アール
本校江ヶ崎農場（近隣保育園）

意識調査（アンケート）を実施（本校生徒・小学生）

イ 研究計画(概要)

平成18年度

- 5月 田植え（本校水田） 市立中央小学校5年生4クラス
サツマイモ苗植え 市立中央小学校2学年 中央小サツマイモ圃場
- 6月 イネ観察（本校水田）
- 9月 稲刈り（本校水田） 市立中央小学校5学年4クラス
- 10月 サツマイモ収穫 市立中央小学校小学校2年生4クラス
農業体験 市サンライズベビーホーム サツマイモ掘り験
農業体験 市おうめい保育園 ラッカセイ収穫

平成19年度

- 5月 田植え（本校水田） 市立中央小学校5学年4クラス
サツマイモ苗植え 市立中央小学校2学年 中央小サツマイモ圃場
農業体験 市おうめい保育園
- 6月 イネ観察（本校水田）
- 9月 稲刈り（本校水田） 市立中央小学校5学年4クラス
- 10月 サツマイモ収穫 市立中央小学校2学年 中央小サツマイモ圃場

ウ 研究報告（事業報告）

平成19年度

5月16日（火） 市立中央小学校サツマイモ圃場
元肥施肥・耕耘

5月10日（水）田植え 9：30～11：30
本校隣接水田10アール
参加生徒 本校生産技術科2年16名
中央小学校5学年4クラス



写真1 型枠付け器による田植え

5月19日（金）サツマイモ作り 9：00～11：00

市立中央小学校イモ用圃場1アール
参加生徒 本校生産技術科2学年
10名
市立中央小学校2学年
120名



写真2 サツマイモ苗の移

千葉日報社・市広報部取材
6月9日（金）市立中央小学校5学年4クラス
115名来校 水田の観察

- 9月13日(水) 稲刈り 13:30~15:45
市立中央小学校5学年4クラス115名来校
千葉テレビ取材 当日・翌日放映
- 10月11日(水) 市サンライズベビーホーム
2~3歳児 23名来校
サツマイモ掘り体験
- 10月25日(水) サツマイモ収穫
参加生徒 本校生産技術科2年野菜専攻生徒
10名
市立中央小学校2年生120名
- 11月 8日(水) 農業体験(ラッカセイ収穫)
3~4歳児 市おうめい保育園児50名
参加生徒 本校生産技術科2年 4名
- 11月24日(金) 市立中央小学校2学年サツマイモ収穫祭「秋ランド」参加
参加生徒 本校生産技術科2年 野菜専攻生徒10名
- 平成19年度
- 5月15日(火) 田植え 本校隣接水田10アール
参加生徒 本校生産技術科2年 野菜専攻生徒 9名
3年 野菜専攻生徒 10名
市立中央小学校5学年4クラス 135名
- 5月28日(月) サツマイモ苗植え付け 市立中央小学校サツマイモ圃場
参加生徒 本校生産技術科2年 野菜専攻生徒 9名
市立中央小学校2学年4クラス 115名
- 6月11日(月) 「田んぼ通信 1号」発行
- 7月10日(火) 「田んぼ通信 2号」発行
- 9月11日(火) 稲刈り 本校隣接水田10アール
参加生徒 本校生産技術科2年 野菜専攻生徒 9名
市立中央小学校5学年4クラス 135名
- 10月 9日(火) サツマイモ収穫 市立中央小学校サツマイモ圃場
参加生徒 本校生産技術科2年 野菜専攻生徒 9名
市立中央小学校2学年4クラス 118名
- 10月23日(火) 市サンライズベビーホーム サツマイモ掘り体験 本校江ヶ崎農場
参加生徒 本校生産技術科2年 4名
サンライズベビーホーム 2~3歳児 29名



写真3 稲刈り風景

エ 18・19年度の取組

18年度の近隣教育機関との連携事業は、計9回を数えた。指導側も生徒も初めてのことであり、手探りでこの事業を続け、事故の無いように慎重に進めてきた。しかし、指導する私自身も本研究本来の目標をおろそかにし、連携事業を進めることだけに労力を掛けてきたように考える。反省点は以下のとおりである。

科目「総合実習」の学習活動として、コミュニケーション能力の習得など目的意識

を持って連携事業を実施するという生徒への事前指導が不足していた。
 連携事業としての、継続性に欠けていた。
 単発的（イベント的）な活動になりやすく、本校生徒の目的意識の低下も考えられる。定期的にアプローチをかけるべきである。
 連携事業による学習成果を、本校生徒に偏って求めていた。
 日常の学習活動で習得した知識・技術の還元は、実現できているとはいえない。小学生に興味関心を持たせるような活動は不十分である。

19年度は18年度の反省を踏まえ、生徒に対して科目「総合実習」で実施する連携事業として、コミュニケーション能力の習得など目的意識を持たせ、そして積極的な取組ができるように指導した。

各事業（稲作，サツマイモ作り）の中での栽培技術指導

「田んぼ通信」の作成

本校生徒に小学校担当クラスを持たせ、プレゼンテーションソフトを使った「通信」を作成。一月1回程度、計2回発行。中央小5年生担当クラスに配布。

生徒によるアンケート作成

イネの乾燥 脱穀 もみすり 精米への授業参加

本校2，3年生合同による事業遂行

オ 結果

「総合実習」効果的指導法を念頭に置き、さらなる充実した教科「総合実習」とするため、新しい取組による成果を模索してきた。

平成19年度は、田植えから収穫、そして「コメ」になるまでを、本校生徒と小学校5年生と一緒に栽培学習する形態を取ることができた。これによって小学生は「食」というものの重要性を認識し、高校生も再認識をするという相乗的効果がこの事業で展開できた。食物を自分達で育てる。そして収穫する。生命の基本を学ぶ学習が、この科目「総合実習」で展開されたことになる。



写真4 田んぼ通信1号・2号

また、「田んぼ通信」は、専門選択専攻生9名を4班に分け、小学5年生4クラスを各担当としてそれぞれ作成させた。小学生のクラス担当をつけることで、製作に責任と意欲を持たせることが可能となった。製作は放課後を使い、情報処理室で行った。プレゼンテーションソフトを使用し、デジタルカメラ等を活用し、小学生が見て飽きない画像の多いものとした。

「田んぼ通信」の作成は、高校生の学習に対する取組む意識が増長されることを意図したものである。ともに作付けしたイネの生育状況をどのような形で知らせれば興味を持ってもらえるのか、考える機会とした。その他の効果として、高校生と小学生の交流によって今では希薄になった世代間の結びつきを新しい形で構築する機会とした。

地域性の崩壊が問題視されて久しい。地域の持っていた教育力が薄れ、幼児期に養われなければならない社会性が欠如している子ども達が多いといわれる。本校においても例外ではない。校内でも学年間での交流は極めて少ない。また、最も有効な交流の機会である部活動にしても、全国的に加入率の低下が叫ばれているなか、本校も同様に部活動は活発とはいえない。地域そして日本の秩序を保ってきた要因として、世代間との関係構築が欠かせないのは、周知の事実である。しかし、責任を地域や生徒にばかり求めても問題の解決にはならない。このような意味でも、世代間の交流の場を意図的に作り出すことは、社会的にも意義のあることであろう。



写真5 「田んぼ通信(便り)」作成風景

またこの連携事業を実施するにあたり、活動記録用紙の記入を徹底させた。生徒は連携事業の目的の確認、実施内容を理解する。その上で取組方などの反省、自己評価等生徒自身でその学習活動の理解を深めさせるためである。

図1 活動記録用紙

千葉県立旭農業高等学校 連携事業(「総合実習」) 記録用紙

生徒姓科年		2年 B組 氏名 大木 遼人	
1 事業名	連携記録(中央小5年との体験)		
2 日時・天候	平成19年 9月 11日(火) 天候 曇り		
3 実施場所	本校北側水田10a		
4 連携団体	旭市立中央小学校5年生		
5 実施方法	小学5年生が体験ハウスにて深められた場所を回り、行方よくて育つ稲をコンパニオンで運んで水田の水を採取した。		
6 課題及び感想	目的をよくとくと感じとていい言葉でよい言葉もまた、自分でも対するの経験がたまたまで今後目的の事でもいかにいかにい		
7 自己評価	①事前の心構えは、できていたか。(5 4 3 2 1) ②自分の役割は果たされたか。(5 4 3 2 1) ③積極的にコミュニケーションが取れたか。(5 4 3 2 1) ④前回の反省は、改善されたか。(5 4 3 2 1) ⑤前回と比較して、良くなったか。(5 4 3 2 1) ⑥事業全体として、成功であったか。(5 4 3 2 1)		
評価合計	29点 30点		

図2 活動記録用紙

千葉県立旭農業高等学校 連携事業(「総合実習」) 記録用紙

生徒姓科年		2年 B組 氏名 石毛 親	
1 事業名	連携事業		
2 日時・天候	平成19年 9月 11日(火) 天候 くもり		
3 実施場所	本校北側水田10a		
4 連携団体	旭市立中央小学校5年生		
5 実施方法	・小学5年生が稲に付いた水をコンパニオンで採取した。 ・観察した稲は、コンパニオンでトランプをラフした。 ・水田を4つに分けて5年生のクラスごとに1箇所を担当して行った。		
6 課題及び感想	小学5年生も稲の成長を対しては、自分の使い方がよくてあつた。自分の稲もいろいろと観察していいと聞いて		
7 自己評価	①事前の心構えは、できていたか。(5 4 3 2 1) ②自分の役割は果たされたか。(5 4 3 2 1) ③積極的にコミュニケーションが取れたか。(5 4 3 2 1) ④前回の反省は、改善されたか。(5 4 3 2 1) ⑤前回と比較して、良くなったか。(5 4 3 2 1) ⑥事業全体として、成功であったか。(5 4 3 2 1)		
評価合計	21点 30点		

キ アンケート結果

平成18年度、生産技術科2年専門選択「野菜」を選択した生徒からも「総合実習」の中で、当番実習の他に地域連携事業を経験することができたことを「よかった」と評価する生徒がほとんどであった（図3）。

また、近隣の小学校、幼稚園、保育園との連携事業を実施してきたが、ほぼ全員から取組に対して満足している結果が得られた（図4）。日常の学習環境では、小学生との交流など異なる年齢差の中での学習はほとんど期待できない。また、教えられる側と教える側など連携事業の中ではまったく逆の立場である。生徒は知識や技術を伝えることの難しさや、聞く側の姿勢など多くを学ぶ機会となったはずである。そして、日常の学習活動からでは得ることのできない経験からも「満足している」ことがうかがえる。日々の学習活動においてはどうしても積極的な姿勢で取り組むことのできない生徒も、小学校との連携事業を回を重ねる中、積極的に接し、取り組むことができるようになったことがわかる（図5）。教えなければならない立場を意識し、この事業や小学生に対する責任感が持てたことは、大きな収穫といえる。

そして連携事業を終了し、生徒達の学習全般に対する意欲の向上の効果を期待した。アンケートの結果90%の生徒が「学習の必要性を感じた」と回答してくれた（図8）。日常の学習成績はこのアンケートの回答ほど向上することはなかったが、知識技術習得を必要とする意識を経験から感じることはとても重要なことと考える。相手と対比して自分の存在を認識をする機会を設けることができたことは、この連携事業の意図するところでもあった。

そのような中、生徒には地域との繋がりを意識できるように事業を進めてきたのだが、活動の中で所属する本校や地元である市を意識する生徒が70%とは、少し意識が低いように思える（図7）。事業

図3 アンケート

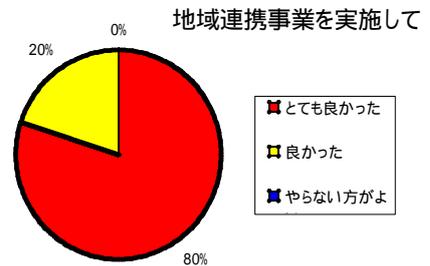


図4 アンケート

地域連携事業では、小学生との交流が楽しかった。

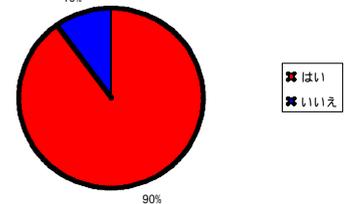


図5 アンケート

積極的に接することができたか

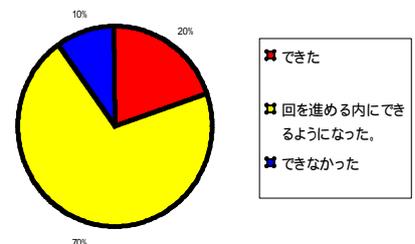
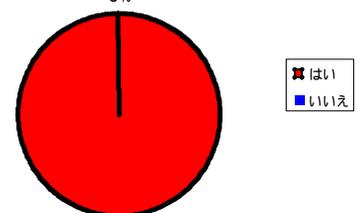


図6 アンケート

連携事業で、教えることの難しさを知った



実施前や実施中を使い生徒に十分に地域を意識することができるような指導の工夫をすべきであった。

市の農業高校で学び、その市の小学生とともに作物の学習を行っている意識が、この事業では大切であると考え。所属意識が薄れ、個人に対する意識が強いといわれている現代の若い世代。異なる年齢間の交流を積極的に設定することは、教育現場においても必要と考える。科目「総合実習」において、世代間の交流を通して所属意識や地域を意識する機会を作ること、有効な教育活動ではないだろうか。

図7 アンケート

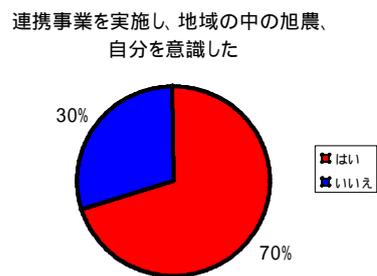
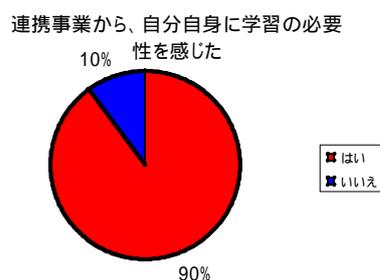


図8 アンケート



4 連携事業の拡大

(1) 各科の取組

平成19年度の本校農場の目標として、「地域との連携」を掲げ一つの方向性を打ち出してきた。

畜産科が中央小学校低学年や保育園、特別支援学校との連携事業として、「動物とのふれ合い体験」を実施している。

生産技術科は前記のとおり、2学年「総合実習」において近隣教育機関との農業を通じた連携事業を進めている。

食品流通科は、平成4年学科創設以来インターンシップ（現場実習）を続けている。

生活科学科も2学年「総合実習」において近隣の保育園・幼稚園との連携事業を本年度より始まった。

(2) 生活科学科2学年 科目「総合実習」内でのプロジェクト研究

平成19年度の新しい取組として、生活科学科のプロジェクトが市内の「おうめい保育園」と「うなかみ幼稚園」との連携で始まった。「食育」をテーマにし、園児と本校生徒が共に野菜を栽培し、その栽培学習を通じて園児達の野菜嫌いを無くしていこうという取組である。

活動に参加している生徒の中には、保育士を進路希望に持つ生徒も多い。しかし実体験が少ない生徒が保育の現場を目の当たりにし、そしてその中で自分達で掲げたプロジェクトを遂行していかなければならない状況は、そう容易いものではない。理想と現実。当然返ってくるであろう回答が返ってこない。暗中模索の中、生徒は発想力豊かで有効な方法を考え出し、難問を打開していく。短時間で見事に園児の中にとけ込み、プロジェクトを遂行する姿は頼もしい限りである。

<活動例1> 園児からの意識調査

園児は意見の強い一人に合わせてしまうため、ひとりひとりに□ の札を上げさせる。これも、生徒ならではのアイデアである。



写真6 手作りの調査方法



写真7 子どもの目線で考えることが大切

<活動例2> 理解・普及

園児と一緒に自分達で栽培した野菜入り蒸しケーキを作る。



写真8



写真9



写真10

一緒に栽培すること、一緒に料理することが大切。

自宅に野菜とともに、料理（蒸しケーキ）のレシピをいれ、園児に持たせる。好き嫌いを直すには、保護者へのアプローチも必要。食事の基本は、家庭にある。

担当する本校生徒も回数を重ねるごとに自信に満ちてきていることが手に取るように伝わってくる。自分達の活動する目的を認識し、プロジェクトを遂行する姿は、他の生徒の模範ともいえるほどである。

また、このプロジェクト研究がNHK千葉支局に取り上げられ、関東甲信越地域に放映されることとなった。生徒の日常の生活の場に、マスコミを通して日々の学習活動が紹介された。活動が客観的に高い評価を得ることができた。本人達の自信とさらなる意欲の高まりとなったことは間違いない。

5 各科共通2学年「総合実習3単位」の1単位を時間割外に設定した効果

本校の2学年「総合実習」3単位中時間割外1単位については、従来の実施方法に加え農業クラブ活動や各科の特色ある取組についても総合実習の活動として認めている。

今まで食品流通科ではインターンシップを早くから導入し、全員参加の方針で指導してきた。もちろん活動自体は有意義で評価されるものであるが、科目 **写真11** 中央小1年「動物とのふれあい」としては存在してこなかった。時間割内の科目「総合実習内での評価にすぎなかったのである。生徒は、一日当たり8時間、計5日間のインターンシップを夏休み中に実施する。



その有意義な学習活動の評価として、総合実習の1単位を修得することができることは、生徒自身にもインターシップへの明確な目的と意義を持つことができることになる。また、指導する際にも他科との共通した単位取得状況ができ、生徒の理解を得やすくなった。

畜産科、生産技術科においても家畜の飼養管理、作物の栽培管理上、時間割内だけの実習では十分に家畜、作物の学習を身に付けることはできない。放課後や長期休業中の実習も含め農業の目標を達成することができる。両科でも現実的に専門選択ごとに生徒の時間割外実習を行ってきた。もちろん、それは時間割内「総合実習」評価であり、専門選択ごとで大きな違いがあった。生徒の不満も生じる場合もあり、この各科共通の時間割外の「総合実習」の設定により、より効果的な学習指導が現在なされている。

また、生活科学科2学年で実施しているプロジェクト研究でも、「総合実習」内で実施していることが有効に働いている。生徒はプロジェクト実施の意義を理解しながらも、大きな成果を生み出すために必要な多くの時間や労力に負けてしまうことが多い。もちろん誘惑も大きいだろう。しかし生徒は、科目内での実施によりプロジェクトに向かう意義付けができる。時間内では到底達成することのできない研究を、膨大な時間と労力をかけ可能としている。このように、生活科学科で大きな成果を上げているプロジェクト学習が、全学科においても実施が可能となっている現状は、生徒の育成上大きな利点といえる。

6 まとめ(科目・「総合実習」の効果的指導法)

本校における従来の「総合実習」の実施状況は、専門選択の中で展開される実習がほとんどを占める。各科の特長を生かした実習により、専門的知識や技術の習得が続けられ、より実践的な学習活動が展開されてきた。

本研究においては、さらなる「総合実習」充実を目指し、教科の目標である「コミュニケーション能力など実践的な能力と態度を育成する」ことに注目した。いわゆる「社会性の育成」である。方策として、学習の場を校外に求め、地域の教育力を活用する選択をした。校外での活動は、近隣の小学校や保育園等との連携事業が主となった。対象となる児童との共同作業である。今までの受動的な学習から立場が変わり、今までの学習活動で習得した知識や技術を工夫して自分自身の力で相手に伝えていかなければならない状況を本校生徒に与えた。なかなか慣れない小学生との接触、伝えきれない自分の力量、反応の少なさに、自分自身への落胆の思いが強くなっていく場合も多かったであろう。しかし、日々の学習活動の成果を実践し、日常の学習活動では得ることが難しい客観的評価を受けることができた。生徒は、小学生との活動を重ねるごとに確実に成長してきたように思える。苦手であった「教える」作業にも積極性が現れ、冷静に小学生の行動を見つめる余裕も持つことができてきた。

また、「自主性の育成」という面では、連携事業前の予備的な学習時に、次に控える連

図9 アンケート

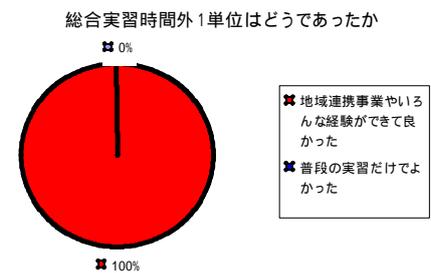


写真11 中央小5年生との稲刈り

携事業に備え真剣に授業に取組む姿勢が見られたことは、この科目「総合実習」で得ることができた成長であろう。また、自分自身でこの学習活動をまとめ、自己を評価する方法として前記のように記録用紙を使った。連携事業の内容をまとめ、反省し、課題を見出す。分析し、自己評価をする作業である。自己の行動を客観的に受け止められる能力を育成する機会とした。

この教科研究で科目「総合実習」をより充実した内容とするため、地域の教育力を活用する方法を選択してきた。生徒は非日常の学習環境から、多くのことを学び取ることができたことを担当として実感する。しかし、実際に地域と連携して課題も多く見つかった。例えば地域連携の場として、小学校だけでなく中学校や地域住民との連携も強めていかなければならないだろう。事業前の生徒への指導にしても、指導時間など不十分な面もある。教科担当として、今以上に充実したものにしていける責任がある。

7 おわりに

農業高校を訪れた中学校の教員や高校普通教科の教員は口を揃えていう。「教室では見られない顔が、農場にはあった。」汗を流しながら一生懸命作物や家畜の世話をしている生徒達。泥やほこりにまみれても、細心の注意をはらって無駄口をこぼさず作業をする生徒達。農業高校で学ぶ生徒の誇るべき姿である。また農業高校では、数十年来農場で生産された安全で新鮮な農産物を地域に提供し、生徒自ら地域に「販売実習」という形でとけ込んできた。現在教育界に求められている「開かれた学校」「地域との連携」など、実際に「地域の中の学校」を実践してきたのは、実は農業高校なのである。

そして農業高校には、科目「総合実習」「課題研究」等の日々の学習活動を実践できる単位も備わっている。自ら目標を設定し、学習の場を学校の外に求め、結果と客観的評価を得ることが可能な科目である。農業クラブの3大目標にも「指導性」「科学性」「社会性」の習得がうたわれている。すべての高校生に社会が求める要素であろう。農業高校はその目標実現のため、日々実習、学校間の連携、地域との連携をとおして学習活動を実践してきた。

しかしこの真の姿を理解するのは、この真剣に農業に立ち向かっている生徒達を目の当たりにした者だけであることも事実である。充実した農業高校の学習活動をどうしたら、他の人に、そして近隣の人達に今以上に理解されるであろうか。そしてその学習成果をどのようにすれば社会に還元できるであろうか。農業高校の抱える大きな問題である。

我々農業科教員はその有効性を認識し、積極的に日々の生徒の学習活動に取込み、地域の理解を得ていく必要があるだろう。

最後に、本研究を進めるに当たって御多用の中、2年間御指導、御助言をいただきました千葉県教育庁教育振興部指導課指導主事 先生をはじめ御協力いただきました関係諸先生方に深く感謝いたします。

参考文献

高等学校学習指導要領解説農業編 平成12年3月(文部科学省)
千葉教育長期ビジョン「千葉の教育”夢・未来2025”」